

そ じんしん こと  
 夫れ人身をうくる事はまれな  
 るなり、すでにまれなる人身をう  
 けたり又あひがたきは仏法・是  
 また おな ぶつぼう なか  
 も又あへり、同じ仏法の中にも  
 ほ けきょう だいもく  
 法華經の題目にあひたてまつる  
 けっく だいもく ぎょうじゃ  
 結句題目の行者となれり、まこ  
 とにまことに過去十萬億の諸仏  
 くよう もの  
 を供養する者なり

(御書 902 ページ 1 行目～3 行目)

### 通解

およそ人身を受けることは、まれな  
 ことである。すでにそのまれな人身を  
 受けている。

また、あいがたきは仏法であるが、  
 これにもまたあうことができた。

しかも同じ仏法の中でも、法華經の  
 題目にあい、その結果、南無妙法蓮華  
 經の題目の行者となった。まことに、  
 まことに、過去世で十萬億の諸仏を供  
 養した方であろう。

## 友の幸福を願い行動する人に

### よくわかる解説

本抄は弘安2年(1279年)9月16日、弟子の  
 寂日房を介して門下に与えられたお手紙です。人間と  
 して生まれることが、いかにまれなことであるかとい  
 う点から、信心に巡り合うことの素晴らしさについて  
 述べられています。

法華經に「一眼の亀」の譬えがあります。この亀は眼  
 が一つしかなく、1000年に一度しか海面に上がること  
 ができません。それでも、海面に上がり「センダン」  
 という良い香りのする木に巡り合うことを願っていま  
 した。人々が法華經に巡り合い、受持することは、自由  
 に動くことができない一眼の亀が、センダンの浮き木に  
 巡り合うのと同じくらい難しいことだと説かれている  
 のです。では、巡り合うことが難しい信心を持った私たち  
 は、どのように生きていけばよいのでしょうか。

今、世界中の同志が、日々、南無妙法蓮華經の題目  
 を唱えながら、目の前の一人を幸せにするために行動

しています。このような、自分も他者も、共に幸せになっ  
 ていこうとする「地涌の菩薩」の生き方こそ、最も尊い  
 のです。

ある中等部のメンバーは、部活内でチームに溶け込め  
 ていない友達がいるのが気掛かりでした。彼は勇気を出  
 して「一緒にお昼ご飯を食べよう」と声を掛け、その後  
 も何度も昼食を共にしました。すると友達に笑顔が増え、  
 協力し合うことができるように。チームとしても歴代最  
 高の成績を残すことができました。彼は「全員が互いの  
 健闘をたたえ合えたことが、何よりうれしいです」と話  
 しています。

池田先生は語られています。「大事なものは、友人をた  
 くさんつくり、友情を固めることです。折伏といい、広  
 宣流布といっても、『友の幸福を願う』という友情の気  
 持ちを広げたものなのです」

身近な人の幸せを祈りながら、信頼の輪を広げていき  
 ましょう！